

ほんとは怖い星座物語 秋冬編

ペルセウスの冒険

秋の空には 1 等星がなくてさびしいですが、有名なギリシアの星物語を思い浮かべながら、ペルセウス座・アンドロメダ座・カシオペア座・ケフェウス座・ペガサス座・くじら座などをたどってみましょう。

昔、ギリシアのアルゴスという小さな国があり、アクリシオス王が治めていました。王にはダナエというひとり娘がいました。ある日「アクリシオスには息子は生まれず、孫によって殺されるだろう。」という恐るべき神託を受けました。恐れ驚いたアクリシオスはダナエに一切の男を近付けぬよう、青銅の塔に幽閉してしまいます。ところが好色の大神ゼウスは、なんと金色の雨粒となって窓から塔に忍び込み、ダナエはみごもりやがて男の子ペルセウスが生まれたのです。アクリシオスは嘆き怒り、娘孫とも箱に詰めて海へ捨ててしまいました。しかし運良くその箱はセリポス島に漂着し、親切な漁師ディクテウスに拾われ、ペルセウスはこの離れ小島でたくましく成長します。ところがディクテウスの兄でセリポス島の領主であるポリュデクテースがダナエに横恋慕するようになり、邪魔になるペルセウスを遠ざけようと画策します。そして言葉巧みに、髪の毛が蛇でその顔を見たら石になってしまうという怪物メドウサの首と取ってくることをペルセウスに約束させてしまうのです。すなわち冒険の旅に出発という名の追放です。

それを見たゼウスは知恵の女神アテナと伝令の神ヘルメス(マーキュリ)に彼の援助を指示し、アテナは楯をヘルメスは翼のあるサンダルを贈りました。ペルセウスはメドウサの顔を見ないように、後ろ向きで接近し楯に映っているメドウサを狙って、首尾よく首を取ることに成功しました。このとき切り落とされたメドウサの首から生まれたのが翼を持ち天を駆けるペガサスです。

メドウサの首を袋に納め天馬ペガサスに乗って帰路エチオピアに立ち寄ったペルセウスは、美しい娘が海岸に鎖でつながれているのに出会いました。わけをきくと、彼女は国王ケフェウスと王妃カシオペアの娘アンドロメダで、カシオペアが自分と娘の美しさは海の妖精にまさと自慢したため、ゼウスの弟である海の神ポセイドンの怒りを買って生贄にされたということです。ペルセウスはアンドロメダを襲ってきたくじらの化物ケイトスに全力を奮って挑戦し、ついにはメドウサの首を見せて石にしまい、アンドロメダを救出したのです。そして二人はめでたく結ばれました。実はアンドロメダにはピーネウスという婚約者がいたのですが、彼女はペルセウスを選んでしまったのです... まあ仕方ないですね。

新妻と一緒にセリポス島に戻って来たところ、母ダナエはポリュデクテースに捕らわれ明日にでも彼の寝所に連れて行かれそうなところでした。ペルセウスはポリュデクテースを攻めメドウサの首を見せて石に変えてしまい、母を救って義父ディクテウスを島の王位に就けます。

その後ペルセウスは生まれた国アルゴスに行ってみたくなくてギリシアに渡り、円盤投げの競技に出場します。彼の投げた円盤は勢い余って観客席に飛び込み、ちょうどそこに居合わせた老人の頭に当たってしまいました。命を落したその老人こそ祖父王アクリシオスだったのです…。やはり神託通り、運命は変えられませんでした。

アルゴスはペロポネソス半島に、セリポス島はエーゲ海に今も実在します。今のエチオピアに海岸はありませんが、昔は紅海まで張り出していたのでしょうか？それともエチアピアとは地中海沿岸のどこか別の国だったのでしょうか？

やぎ うお

牧神パンは山羊の姿をしていて、アルカディアの野山に住み羊飼いと仲良しで、彼らに葦笛の吹き方や踊りを教えました。パンはかつてシュリンクスというニンフになわめ恋をしたことがあります。パンはシュリンクスを追いかけますが、彼女は嫌がって逃げまわります。川のほとりに追いつめられた彼女は仲間の助けを借りてやっとのこと逃げ出せました。そこへ追ってきたパンが、捕まえてシュリンクスと思ってかき抱いたものはなんと1本の葦だったのです。パンはため息を漏らしますが、その息は葦の中に入り美しい音色を奏でました。そこでパンはこの葦から笛を作りシュリンクスと名づけ、やがて葦笛の名手になりました。

ある日仲間の神々とナイルの川辺で酒盛りをしていると、怪物デュフォンが現れたので、みんなそれぞれ川に逃げました。パンも魚に変身して川に飛び込みましたが、慌てたため上半身は山羊のままでした。そのためパンは半山羊半魚として描かれています。牧神パンは後世の芸術家から愛され、ドビュッシーも有名な前奏曲を作曲しています。

このときやはりナイル川に飛び込んだ神々の中に愛と美の女神ビーナスとその息子であるエロスがいます。つながった2匹の魚の姿で描かれているうお座は、2人が手をつないで飛び込んだ時の姿です。

なお、エロス(別名キューピッド)は当たると最初に出会った異性に死ぬまで恋してしまう力のある黄金の矢を持っています。アポロンがダブネに叶わぬ恋をしたのも、ハデスがペルセポネをさらったのも、メディアがイアソンに一目惚れしたのもこの愛の矢のせいです。ところが彼は誤って自分にも当ててしまい、自分の矢の魔力をコントロールできず、プシュケという乙女と恋に陥ってしまいます。しかしこの恋は母神ビーナスの許さぬ恋であり、二人は様々な試練を課せられますが、最後はゼウスからもビーナスからも祝福されて結ばれます。凄惨な話の多いギリシア神話の中ではこれらハッピーエンドのお話は例外です。

エロスの放った黄金の愛の矢は夏の夜空に飛んでいってや座になっています。

おうし

フェニキアの王女エウロパは父王アゲノルの自慢の美しい娘で世界中の若者の憧れの的でした。ある日侍女達と一緒に海辺で遊んでいたところ、どこからか真白の牛が現れてきて、彼女の側に座り込みました。その牛の背中に腰を下ろすといきなり牛は立ち上がり、エウロパを乗せて走り出しました。侍女たちが追いかけるのを振り切って、海に飛び込み沖に向かって泳いでいます。エウロパは恐怖のあまり必死で牛の角をつかんでいました。



地中海を西へ進み、やがてクレタ島にたどり着き、そこで牛は正体を現しました。それは神々の主神でオリンポス山の神殿に住んでいるはずのゼウスでした。実はゼウスは好色なことでも神々の中で随一で、正妻ヘラの目を盗んで、美女であれば娘であれ人妻であれ、逃さず自分のものにしてしまいます。エウロパはクレタ島でゼウスの何番目かの妻として暮らし、彼女の名 **Europa** はヨーロッパの語源となり、彼女はすべてのヨーロッパ人の母となったわけです。

ヨーロッパ文明の始まりはギリシアですが、ギリシア文明の源はクレタ島を中心とするエーゲ海文明です。フェニキア→クレタ→ギリシア、この物語はそのことを示唆しているみたいですね。

なお、おうし座は上半身しか描かれていないのは、下半身は地中海の水面下にあるからです。おうしの突進をオリオンが迎え撃つように見える星座絵がありますが、それは違うでしょう。

オリオン

海の神ポセイドン(ゼウスの弟)と女人国アマゾンの女王エウリアレーとの間に生まれたオリオンは無類の勇者で、ヘルクレスと並ぶ英雄です。腕力は強くて、狙った獲物は決して逃さず必ず仕留めてしまう名狩人でした。特に鹿狩りが得意で、ギリシアからエーゲ海の島々の野を駆け巡りました。おまけにとびきり美男でしたから愛人もたくさんいました。しかし、自分の腕を自慢しすぎたため、ゼウスの正妻ヘラの怒りを



買い、彼女の差し向けた さそりに踵を刺されてあっけなく命を落してしまうのです。そのためオリオンはいまだにさそりが怖くて、さそりが沈んでから昇って来るし、またさそりが昇って来るとあわてて西に沈むといわれています。密猟乱獲者オリオンは自然保護者ヘラの派遣した警備隊さそりに

射殺された話とともれますね。

別の物語では月の女神アルテミスがオリオンに恋してしまったが、兄アポロンはそれを許さず、オリオンを虹に変えてアルテミスを騙し射させたともいわれています。オリオン座とさそり座のもう一つの共通点は α 星（ベテルギウスとアンタレス）がともに赤色超巨星であるということです。太陽の数百倍も膨れ上がり遠くない将来、超新星爆発を起こしても不思議ではありません。

おひつじ・アルゴ船物語

おひつじ・アルゴ船物語はギリシア神話の凄惨な面を代表する悲劇で、古代から現代まで様々な文芸作品に取り上げられています。この小文は元の物語を筆者なりに脚色改変したことをご了解ください。なおアルゴ座という星座は今はありませんが、ギリシア時代には、おおいぬ座の東南の空に描かれていました。しかも歳差運動のため当時この方向は北半球からも見えていました。そこは星の密度が高く、星雲・星団などもひしめいていて、壮大な船を思い浮かべるには適しています。しかし 1750 年ラカイユはこの大星座を、らしんばん座、ほ(帆)座、とも(船尾)座、りゅうこつ(龍骨)座に四分割してしまいました。

ギリシア北部のテッサリアにフリクソスとヘレという幼い兄妹がいました。二人は国王アタマスの子ですが、彼らの母ネフェレは離縁されてしまい、新たにやってきた

お妃イーノーに何かと邪魔者扱いされていました。ある年、この国は大凶作に見舞われ、王はゼウスの神殿にお伺いと立てると、なんと「フリクソスを生け贄にして捧げよ。」との神託が下りました。王は国の飢饉を放っておくわけにもいかず、やむをえず神のお告げに従うことにしました。実は凶作も神託もすべてイーノーが農民や神官を買収して仕組んだ悪企みだったのです。それに気づいたネフェレは二人のわが子を救うため、ゼウスに祈りました。ゼウスもその願いを聞き届け、二人のもとに全身金色の毛を持ち空を飛ぶことのできるお羊を遣わしました。兄妹を背中に乗せたお羊は、王の館を脱出し東へ東へ飛んでいきます。ところが途中であまりの高さに目の眩んだヘレは、海の中にまっさかさまに落ちてしまい帰らぬ人となってしまいました。その海はエーゲ海と黒海の境で彼女の名をとってヘレスポントス海峡と呼ばれています。妹を捜すこともできないフリクソスはそのまま飛び続け、やがて黒海の東岸コルキス国に着きました。彼はコルキスの国王に暖かく迎えられ、その国で幸せに暮らしたということです。コルキスとは現在のグルジアに実在した国でギリシアから渡来した人も多数住んでいました。フリクソスはゼウスとアイエセスへの感謝のしるしとして、その金毛のお羊を捧げ、毛皮はコルキスの宝として眠らぬ龍が守ることになりました。

アタマスやイーノーはそのまま、最も活躍したお羊は焼き殺されてゼウスへの捧げ物にされたというのは何とも後味悪い話ですね。

さてアルゴ船とはギリシアのイオルコスの王子イアソンの率いる冒険船の名です。イアソンの父アイソンは弟ペアリスに王位を奪われ、幼いイアソンは半人半馬のケンタウルス族のケイロンに育てられました。成人したイアソンは叔父の王宮へいったところ、王位を返してもらう条件として黒海東岸のコルキスにある金毛の羊皮を取りに行くことになりました。イアソンはギリシアの若者50人を募って巨大な船を作って出発しました。その中にはヘルクレス、カストル、ポルックス、オルフェウスなど大型の勇士が多数参加しましたが、彼らはあまり活躍していません。アルゴ船は



は数々の困難を経て航海しますが、その間にはある島で休憩中にヘルクレスが寝過ぎて置いてきぼりになった話もあります。ともかくエーゲ海から黒海に入りコルキスに着き、イアソンはコルキス王に金毛の羊皮をギリシアに返すよう要求しますが、王はもちろん承知しません、まあアタリマエですね。それどころか難題を吹っかけてイアソンを殺そうとします。しかしイアソンに一目惚れした王女メディアの魔法の力を借りて龍より金毛の羊皮を奪って、さらにメディアをも奪ってギリシアへ帰還します。これでは勇ましい冒険物語というよりまるっきり略奪遠征記で、コルキスの王に同情したくなりますね。

ところがここから、こわ〜い物語に転じます。コルキス脱出の際にメディアは幼い弟アプシュルトスを連れて来るのですが、父王の船に追いかけられたときに、この弟の体をバラバラに切り刻んで海に捨ててしまいます。英雄揃いのアルゴ船の乗組員もビックリ、声も出ません。コルキスの兵たちが慌てて遺体を捜し拾い集めている間にアルゴ船は逃げる事ができたのです。何と怖いこと、でも自分を助けてくれたこの魔女と結婚せねばならない・・・イアソンは悩みます。帰路は嵐に遭い黒海からドナウ川を遡り、北海に出て大西洋回りで地中海に入ったようです（ありえないような経路ですが気にしないで）。その間に多くの怪物や魔女の攻撃を受けたり、極寒の島に漂着したり、青銅人に追いかけられたり・・・長くなるので省略・・・やっと故国へ着きました。

帰国後、イアソンは叔父ペアリスに金毛の羊皮を渡しますが、約束は守られず、2人は王位を争うことになります。そのときメディアはイアソンのために残虐な手助けをします。若返りの妙薬の入ったという豪華な風呂の中にペアリスを誘い入れて煮殺してしまうのです。イアソンは王位に就いたものの、次第に妻に対し気味が悪くなり嫌気がさしてきました。さらにイオルコスの人々も彼を王とは認めず、二人を追放してしまいます。国を追われた二人はコリントスに住みますが、そこでイアソンは国王に気に入られ王女と結婚することになってしまいます。怒り狂ったメディアは国王・王女を焼き殺し、さらにわが子も刺し殺し、龍の車に乗って逃亡します・・・でもイアソンは殺せない、すべては彼のためにやったこと・・・別離した二人はともに不幸な晩年を送ります。メディアは一時アテネの王妃に収まりますが、王子テセウス（クレタ島の魔牛ミノタウロスを退治してギリシアをクレタから独立させた英雄）に追い出されて、最後に住み着いたところは後にメディア（ペルシアの北部あたり）とよばれるようになりました。

一方、老いたイアソンはひとり諸国を放浪の末、とある入江につながれた廃船アルゴを見つけました。「お前も年をとったなあ。」イアソンは近寄って懐かしそうに船端をなで、曲がった腰を伸ばして船上に乗っていきました。ところが老いた船は老人一人の重みにも耐えられず、ギーギーと音をたて崩れ落ちていきます。イアソンは朽ち果てたアルゴ船の破片に囲まれ、数々の冒険を思い出しながら、寂しくその生涯を閉じるのでした。

さて一番悪いのは誰でしょう？ イアソン？メディア？ いやいや実は、メディアが父や弟を裏切り残虐な魔女になってまでイアソンに激しい恋をしたのは、ビーナスがイアソンを助けるために、息子のエロスに命じてメディアの心臓に愛の矢を射せたためなのです。事件の元凶はいつも神々の気まぐれです。